

昭和 46 年 度

地力保全基本調査成績書

[稚内地区 猿 払 村]

北海道立中央農業試験場

115

序

現状における土地生産力は諸種の土壌的阻害要因によつて十分にその地力を発揚できない場合が少なくないのみならず、一方では剥脱要因もあつてその地力は消耗低下しつつある。従つてこれら阻害要因を排除して合理的かつ適切な地力保全の対策を推進し、もつて当面の農業構造改善の基盤整備に資するため、昭和34年より農林省農政局の助成を得て基本的土壌調査分類を実施している。

本調査成績書は昭和46年度に行なつた6地域12市町村をとりまとめたもので、ここにこれを公表し営農安定の資に供する次第である。

現地調査の遂行に際して御協力を得た関係市町村、農業協同組合ならびに農業改良普及所の関係各位に対して、深く感謝の意を表する。

昭和47年3月

北海道立中央農業試験場

場長 和田 忠雄

調査並びに取まとめ方法

本調査は、凡そ100ha以上の集団になっている農耕地および付帯地を調査対象とし、調査および取まとめに当つては、夫々下記の資料に基づいた。

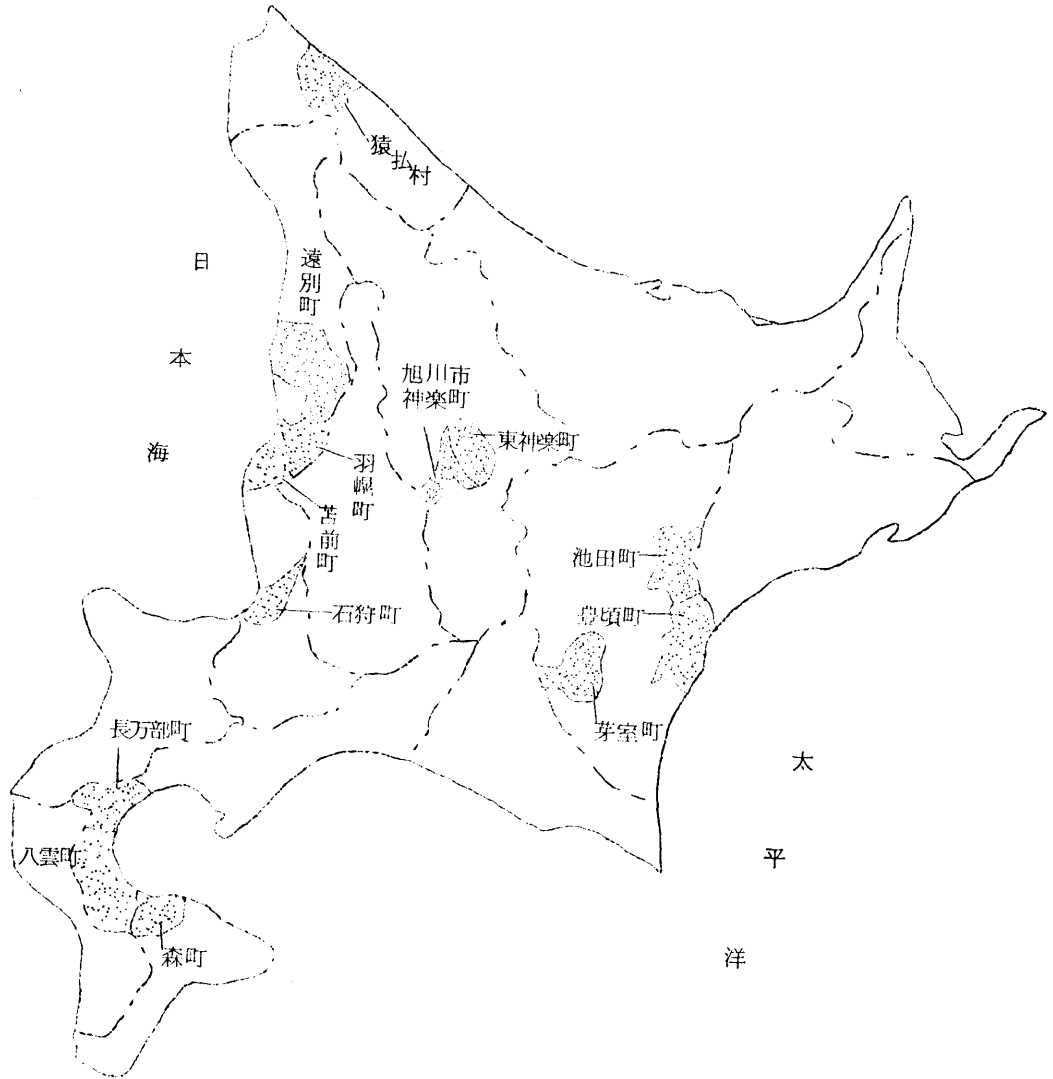
1. 土壤断面調査および現地での営農状況は地方保全対策資料第6号（昭和36年9月、農林省振興局農産課）によつた。
2. 土壤統および区の設定並びに土壤生産力可能性等級基準は、地方保全対策資料第12号（昭和40年3月、農林省農政局農産課）及び水田土壤統設定第1次案（昭和38年12月、農技研化学部第3課）による。
3. 土壤統および土壤区の設定に当つては、北海道農業試験場農芸化学部土壤第1研究室の土性図を参照した。

化学部	部長	森	哲郎
土壤改良科	科長	後藤	計二
	第1係長	小林	莊司
	研究職員	水元	秀彰
	“	伊東	輝行
	“	木村	清
	“	松原	一実
	第2係長	山口	正榮
	研究職員	小林	茂
	“	宮脇	忠
	“	山本	晴雄
	“	高橋	市十郎
	“	上坂	晶司
	十勝農試	菊地	晃二
	“	関谷	長昭
	“	横井	義雄
	北見農試	秋山	喜三郎
	上川農試	野崎	輝義
	“	土居	晃郎
	天北農試	奥村	純一

1. 調査地域一覽

調査地域名	該 当 市 町 村 名	農地面積(調査対象面積)(ha)		既調査面積 (ha)		本年度調査面積(ha)	
		水 田	畑	水 田	畑	水 田	畑
十勝東部	豊 頃 町	351	7,672	0	0	351	7,672
	池 田 町	1,758	6,232	0	0	1,758	6,232
渡島噴火湾	八 雲 町	620	3,988	0	0	620	3,988
	長 万 部 町	210	1,872	0	0	210	1,872
駒ヶ岳山麓	森 町	389	1,568	0	0	389	1,568
十勝岳西山麓	旭川市神楽町	1,941	2,142	0	0	1,941	2,142
	東 神 楽 町	2,705	624	0	0	2,705	624
留 萌	苫 前 町	1,763	946	0	0	1,763	946
	羽 幌 町	2,112	549	0	0	2,112	549
天 塩	遠 別 町	1,346	1,441	0	0	1,346	1,441
石狩北部沿海	石 狩 町	3,206	768	0	0	3,206	768
稚 内	猿 払 村	0	3,041	0	0	0	3,041
十勝中部	芽 室 町	115	18,003	0	0	115	18,003

調査地区位置図



稚 内 地 域 猿 払 村

1. 地域の概要

1) 位置及び調査面積

- (1) 位置 北海道宗谷郡猿払村
 (2) 調査面積 (ha)

郡市町村名	調査対象面積			過年度調査面積		
	普通畑	樹園地	計	普通畑	樹園地	計
猿 払 村	1,636		1,636	—	—	—

本年度調査面積			次年度以降調査計画面積			備 考
普通畑	樹園地	計	普通畑	樹園地	計	
1,636		1,636	—	—	—	完了

2) 気 候

積雪寒冷の特殊気候である。すなわち、農期間（5月～9月）の積算気温は2,300℃以下であり、日の最低気温は5℃未満の日数は年間200日以上である。年間を通して見ると春季は降雨少なく強風（札幌の約1.5倍といわれている）と相俟って発芽不良・初期生育不振を招く。しかし7月上旬からは雨量は多目となり、この時期が牧草の収穫期に当たるために刈取後の乾燥を妨げ、品質の低下の原因となっている。また日照時間が少なく、札幌の951.5時間に対し僅かに850時間にすぎない。

猿払村気象観測所における成績は次の通りである。 (20年平均)

項目	月別	4	5	6	7	8	9	10	11
気 温 (℃)	平 均	3.8	9.2	12.5	17.1	19.5	15.4	9.0	1.8
	最高平均	8.5	14.7	17.7	21.7	24.2	20.9	14.9	6.3
	最低平均	-0.9	3.7	7.3	12.5	14.8	9.8	3.0	-2.8
降水量 (mm)	平 均	51	61	55	99	100	125	99	107

初霜 10月9日 晩霜 5月26日

初雪 10月26日 晩雪 4月22日

3) 土地条件

(1) 地 形

本村は総面積588.47Km²で北部は稚内市と、西部は豊富町および幌延町、南部は浜頓別町とそれぞれ接し、東部はオホーツク海に面している。

オホーツク海面は海岸段丘が発達し、これを縦断して知床川、鬼志別川、猿払川、猿骨川

が流れ、これらの流域には沖積土壌と泥炭土壌が分布している。猿払川のやや内陸には河岸段丘が分布する。また西部の標高の高い地域には傾斜の急な丘陵地が存在している。

(2) 地 質

本調査地域には多種多様の土壌が分布するが、大別すると次の如く区分される。

- ①、西部の標高の高い丘陵地に分布する中生層頁岩、三紀層砂岩の残積土壌
- ②、①よりやや標高の低い波状性段丘地に分布する砂岩を主材とした洪積土壌。
- ③、浅茅野よりシネシンの海岸に沿って分布する砂岩に火山灰を混入した洪積土壌。本土壤は下層に砂層を有する。
- ④、浜頓別町山軽より浜猿払のオホーツク海岸沿に沿って分布する砂丘土壌。本土壤は漂白化作用が認められる。
- ⑤、各河川の支流域に分布する沖積土壌。
- ⑥、および泥炭土壌。

以上の如く分類されるが、最も農耕地として利用されているのは③であり、②、⑤、⑥も若干利用している。

(3) 侵蝕状況

春季は降雨少なく風が強いが、本地帯は草地が多く、また重粘土壌が多いので風蝕のおそれはない。残積土壌および重粘堅密な洪積土壌で傾斜が急なところでは水蝕が若干認められる。

(4) 交 通

本町のほぼ中央を天北線が縦断し、また国道238号が海岸に沿って通っているので交通の便は比較的良好。

4) 土地利用及び営農状況

猿払村全体の状況は次の通りである。

a) 営農面積および作付面積 (1戸当り平均ha)

耕地面積 15.3 普通作物 0.2 牧草 14.8 飼料根菜 0.2

b) 耕種肥培慣行および収量 (Kg/10a)

牧草基肥 N 2 P₂O₅ 7 K₂O 2 , 追肥 N 5 P₂O₅ 6 K₂O 3
収量 3,000

c) 乳牛飼育頭数 (1戸当り平均)

搾乳牛 8.9 育成牛 5.9

d) 農機具総数 (総数)

トラクター 47 自走式ハーベスター 1 グラスチョッパー 8 ハーベラー
4 トレーラ 10 ファームワゴン 11 ハーモア 39 ハーレーキ 12
ローターベーター 10 尿散布機 5

本村の農業は酪農専業地帯であるが、耕地面積が狭少でかつ土地が細分化され、牧草の収量が低いため経営は不安定である。今後は経営面積の拡大を計るとともに、集約的な牧草栽培を行な

って乳牛の多頭化を進めるべきである。

2. 土壤類型区分及び説明

1) 土壤統一覧及び土壤区一覧

(1) 土壤統一覧

土壤統一名	色層序	腐植層序	礫石、砂礫石、屎を混在する砂層	炭化沈植物	土 性		堆積様式	母 材
					表層	次層		
石炭別統	YR/YR	表腐植層	あり	なし	強粘質	強粘質	残積(中生層)	同結氷成岩(頁岩)
小石統	"	"	なし	あり	"	"	"(三紀層)	"(砂岩)
猿払統	"	"	あり	"	"	壤質	洪積(海成)	"(砂岩)
上猿払統	"	"	"	"	"	強粘質	"(")	"
浅茅野統	"	表腐植層	"	なし	壤質	壤質	"(")	同結氷成岩(海砂) 同結氷成岩(火砕)
カムイ統	N/B	"	なし	あり	泥炭	強粘質	"(")	同結氷成岩(頁岩)
ベニヤ統	YR/YR	表腐植層なし	あり	"	砂質	砂質	沖積(海成)	同結氷成岩(海砂)
鬼志別統	"	全腐植層	なし	なし	強粘質	強粘質	"(河成)	同結氷成岩(砂岩)
モケウニ統		"	"		泥炭	泥炭	"(")	ヨシ、ヌマガヤ、ミスゴケ

(2) 土壤区一覧

土 壤 区 名	簡略分級式	耕地面積 (ha)	備 考
石炭別統—石炭別区	III t f n II d p w e e	2	農牧適地面積 4 1 1
小石統 — 小石区	III t II d p w i n s e e	6 6	3 6 7 1
猿払統 — 猿払区	III t II d g p f n e e	2 5 5	7 1 5 0
上猿払統—上猿払区	III n II t p d w f a s	2	7 3 0
浅茅野統—浅茅野区	III (w) f n II d	1 0 3 8	4 1 4 6
" — シネシニコ区	III p f n II t d w	9	2 5 1
カムイ統—カムイ区	IV w III n II f a	1	7 4 4
ベニヤ統—ベニヤ区	IV (w) III t f n II e	2	8 4 8
鬼志別統—鬼志別区	III f II t p w n a	1 7	1 6 0 0
" — 知来別区	III w n II t p a	1 0 1	1 4 0 7
" — ボロナイ区	III w n II t p f a	3 1	8 6 3
ボロ統 — ボロ区	IV w II n a	7 8	4 3 8 1
" — 猿骨区	IV w III i II f n a	3 2	1 7 8 6
" — モケウニ区	IV w III f n II a	2	2 7 2

石 炭 別 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は10～15cm、腐植含量1%内外、土性はSiCである。色は7.5YRで彩度2、明度4、発達中度の細塊状構造、ち密度2.1で中、pH(H₂O)4.8、下層との境界はやや明瞭である。

第2層は20～25cm、腐植含量5%内外、土性はCである。色は10YRで彩度5、明度8、発達弱度の細塊状構造、ち密度2.1で中、小風化礫に富む。pH(H₂O)5.2、下層との境界は漸変する。

第3層は20～25cm、腐植含量2%内外、土性はCLである。色は10YRで彩度4、明度5、発達弱度の細塊状構造、ち密度2.5で密、小風化礫にすこぶる富む。pH(H₂O)5.6、下層との境界は漸変する。

第4層は50cm以下、腐植含量1%内外、土性はLiCである。色は2.5Yで彩度4、明度5、ち密度3.0で極めて密、礫層、pH(H₂O)5.1。

代表的土壤断面

(所在地) 宗谷郡猿払村上猿払

層位	採取部 位 cm	腐植にすこぶる富む灰褐色(7.5YR4/2)のC、発達中度の細塊状構造、ち密度2.1で中、pH(H ₂ O)4.8、調査時の湿り半乾、境界はやや明瞭
第1層	0～10cm	
第2層	10～35	腐植に富む黄褐色(10YR8/5)のC、発達弱度の細塊状構造、ち密度2.1で中、小風化礫に富む。pH(H ₂ O)5.2、調査時の湿り半乾、境界は波状漸変。
第3層	35～65	腐植に欠く黄褐色(10YR5/4)のCL、発達弱度の細塊状構造、ち密度2.5で密、小風化礫にすこぶる富む。pH(H ₂ O)5.6、調査時の湿り半乾、境界は波状漸変。
第4層	65～	腐植に欠く灰色(2.5Y5/4)のC、ち密度3.0で極めて密、礫層、調査時の湿り半乾、pH(H ₂ O)5.1

代表的断面の分析成績

層位	採取部 位 cm	水分 %	礫含量 重量%	粒 径 組 成 %				土 性	現地容積 重 g	比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐 植 %
				粗 砂	細 砂	シルト	粘 土							
1	0～7	4.2		2.1	14.0	45.4	38.5	SiC		2.5	6.59	0.35	18.8	11.3
2	7～32	1.7		22.5	13.9	33.0	30.6	LiC		2.8	3.10	0.16	19.4	5.3
3	32～62	3.7		12.9	29.3	34.2	23.6	CL		2.9	1.10	0.06	18.3	1.9
4	62～	3.3		20.3	19.4	33.2	27.1	LiC		2.9	0.84	0.05	16.8	1.4

層位	pH		置換酸度 γ_1	塩基置換容量 $me/100g$	置換性塩基 $me/100g$				石灰飽和度 %	磷酸吸収係数	有効磷酸 $mg/100g$
	H ₂ O	K ₂ O			CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O			
1	4.8	4.4	3.5.3	2.9.3.8	6.1.2	1.8.6	0.3.7	0.1.4	2.0.8	8.2.8	0
2	5.2	4.2	5.1.8	2.8.0.9	3.1.9	0.8.1	0.3.5	0.1.2	1.1.4	1.3.0.3	0
3	5.6	4.4	4.1.8	1.8.9.0	1.4.2	0.3.5	0.2.1	0.0.8	7.5	1.0.7.2	0
4	5.1	4.3	5.4.0	2.1.6.5	2.6.6	1.2.4	0.3.2	0.1.7	1.2.3	7.4.2	0

A-2 他の土壌統との関係

本土壌統に類似する統としては小石統があげられるが堆積様式を異にするので区分した。

A-3 母材

固結水成岩（頁岩）

A-4 堆積様式

残積（中生層）

B 地形

丘陵地

C 気候

春季は降雨少なく強風と相まって発芽不良、初期生育不振を招く、しかし7月上旬より雨量は多目となり、この時期が牧草の収穫期に当るため刈取り後の乾燥を妨げ、品質低下の原因となっている。

D 植生および利用状況

ほとんど未利用地である。

E 農業上の留意事項

なし

F 分布

北海道宗谷郡猿払村

調査および記載責任者

奥村 純一

（北海道立大北農業試験場）

年 月 日

昭和47年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡略分級式
石炭別統—石炭別区	III t f n II d p w s e

② 土壌区別説明

石炭別統 — 石炭別区

示性分級式 (畑)

土壌生産力の可能性等級	表土の厚さ	有効土層の深さ	耕転の難易	表土の粘着性	表土の乾硬性	土壌透水性	自然保湿度	自肥力	養分固定率	置換性	苦土含量	有効態量	微酸度	障害物質の有無	物理的障害性	増冠水の危険度	地すべりの危険度	傾斜	人為的傾斜	侵蝕性	耐水性	耐風性														
t	d	g	p		w		f		n				i	a	s	e																				
III	III	II	I	II	3	2	2	II	1	2	2	III	1	2	3	III	3	1	1	3	1	4	I	1	1	I	1	1	II	3	N	-	II	2	2	1
簡略分級式 III tfn II d p w s e																																				

A. 土壌区の特徴

この土壌は石炭別統に属する。作土の厚さは10cm内外で浅い。有効土層は50～60cmでやや浅い。表土は粘質のため農具の使用に当ってはやや抵抗を感じる。保肥力大、固定力小、塩基状態は不良である。有効態磷酸少なく、強酸性で養分も少なく自然肥沃度の低い土壌である。特殊の障害性、災害性はない。傾斜強く、早春の融雪時または多雨には侵蝕のおそれがある。

B. 植生および利用状況

シラカバ、ハンノキ、カシワ、シコロ、ヨモギ、イワノガリヤス、ササなどが密生する未利用地が殆んどである。

C. 地力保全上の問題点

浅表土で下層は急激に養分分に乏しいので草地造成する際は表土を有効的に利用する必要がある。したがって本統は表層攪拌方式をとるべきである。また強酸性、磷酸欠乏土壌であるため、これらの土壌改良として炭カル、燐燐などを多投すべきである。

D. 分 布

北海道宗谷郡猿払村上猿払

調査および記載責任者 奥村 純一

年 月 日 昭和47年3月31日

小 石 統

(1) 土壌統の概要

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は7cm前後、腐植含量7.9%内外、土性はSiCである。色は10YRで彩度4、明度3
発達中度の細塊状構造、ち密度1.7~2.2で中、pH(H₂O)5.1前後、下層との層界明瞭。

第2層は2.0~2.3cm、腐植含量6.7%内外、土性はHCである。色は10YRで彩度明度とも
4、発達中度の塊状構造、ち密度2.3~2.4で中、pH(H₂O)5.4、下層との層界は波状漸変。

第3層は2.0cm内外、腐植含量4.1%内外、土性はLiC、色は10YRで彩度4、明度5、発
達弱度の塊状構造、ち密度2.5で密、pH(H₂O)5.2、下層との境界漸変。

第4層は2.0cm以上、腐植含量2.4%内外、土性はLiC、色は10YRで彩度4、明度5、板
状構造、ち密度2.6~2.8で密、pH(H₂O)4.9。

代表的断面形態

(所在地) 宗谷郡猿払村小石

第1層	0~7cm	腐植に富む黄褐(10YR3/4)のSiC、細塊状構造、ち密度は2.2で中、pH(H ₂ O)5.1、調査時の湿り湿。
第2層	7~30	腐植に富む黄褐(10YR4/4)のHC、塊状構造、ち密度2.4で中、pH(H ₂ O)5.4、調査時の湿り湿。
第3層	30~50	腐植は含む黄褐(10YR5/4)のLiC、塊状構造、ち密度2.5で密、pH(H ₂ O)5.2、調査時の湿り湿。
第4層	50~70	腐植は含む黄褐(10YR5/4)のLiC、板状構造、ち密度2.7で密、pH(H ₂ O)4.9、調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部 位 cm	水分 %	礫含量 重量%	粒 径 組 成 %				土 性	塊 粒重g	比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐 植 %
				粗 砂	細 砂	シルト	粘 土							
1	0~7	3.3		1.4	11.4	46.2	41.0	SiC	143	2.5	4.57	0.31	1.47	7.9
2	7~30	4.0		2.6	11.0	36.2	50.2	HC	147	2.7	3.92	0.26	1.96	6.7
3	30~50	4.7		8.0	25.7	33.5	32.8	LiC	164	2.8	2.40	0.10	2.40	4.1
4	50~70	4.0		8.9	20.4	34.4	35.2	LiC	178	2.7	1.40	0.04	3.50	2.4

層位	pH		置換酸 度Y ₁	塩基置換 容量 me/100g	置 換 性 塩 基 me/100g				石 灰 飽 和 度 %	燐 酸 吸 収 係 数	有効陽離 子 mg/100g
	H ₂ O	K ₂ CO ₃			CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O			
1	5.1	4.0	37.3	22.68	4.58	1.83	0.32	0.18	20.2	318	0
2	5.4	4.2	57.4	32.65	3.05	0.92	0.25	0.25	9.3	812	0.6
3	5.2	4.2	66.3	32.65	1.98	1.07	0.18	0.23	6.1	862	0
4	4.9	4.2	104.0	37.80	2.61	3.82	0.31	0.28	6.9	1816	0

A-2 他の土壌統との関係

本土壌統に類似する統としては浅茅野統があるが残積で、堆積様式も異なるので区分される。

A-3 母材

固結水成岩（砂岩）

A-4 堆積様式

残積

B 地形

波状丘陵

C 気候

春季は降雨少なく強風と相まって発芽不良、初期生育不振を招く。しかし7月上旬より雨量は多目となり、この時期が牧草の収穫期に当たるため刈取り後の乾燥を妨げ、品質低下の原因となっている。

D 植生および利用状況

一部草地として開発されているがまだ多くの面積が未利用地である。

E 農業上の留意事項

一部排水の必要あり。燐酸資材の多投。

F 分布

北海道宗谷郡猿払村

調査および記載責任者

奥村 純一

（北海道天北農業試験場）

年 月 日

昭和47年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡 略 分 級 式
小 石 区	III t II d p w f n s e

② 土壌区別説明

小 石 統 一 小 石 区

示性分級式 (畑)

土壌	表土	表土	耕土	表土	表土	土	土	白	養	置	有	微	障	災	傾	傾	侵	耐	耐																
生産力	効	土	土	表土	表土	地	透	保	湿	然	保	固	土	置	換	有	微	障	災	傾	傾	侵	耐	耐											
厚	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の										
性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性										
等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等										
級	級	級	級	級	級	級	級	級	級	級	級	級	級	級	級	級	級	級	級	級	級	級	級	級	級										
t	d	e	p			w				f			n					i		a		s		e											
III	II	I	II	3	2	2	II	2	2	2	II	1	1	3	II	2	1	1	3	1	3	I	1	1	I	1	1	II	2	NE	-	II	2	2	1
簡略分級式 III t II d p w f n s e																																			

A. 土壌区の特徴

この土壌区は小石区に属する。表土の厚さは10 cm内外で浅いが、有効土層は70 cm以上ありや深い。表土は強粘質で粘着性が強く農具の使用にあたっては抵抗がある。透水性、保水性とも中庸であるが、過湿のおそれがある。保肥力は大きく、固定力は小、塩基の状態は不良、自然肥沃度中位。作土は苦土、石灰、加里に富むが磷酸に乏しく強酸性である。障害、災害性殆んどない。

B. 植生および利用状況

ほとんど原野のまま放置。

C. 地力保全上の問題点

表土の腐植層は浅く、下層より急激に養分分の少ない土壌であるため、草地造成には表層攪拌方式をとるべきである。造成時には磷酸、石灰の土壌改良資材の投与の手扱きは許されない。

D. 分 布

北海道宗谷郡猿払村小石

調査および記載責任者

奥村 純一

年 月 日

昭和47年3月31日

猿 払 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は10~12 cmで腐植含量13%内外、土性はL i Cである。色は7.5 YRで彩度4、明度3、全量弱度の細塊状構造、未風化小田礫を含む。ち密度2.0で中、pH (H₂O) 5.5、下層と

の境界は明瞭である。

第2層は20～22cmで腐植含量6%内外、土性はLiCである。色は7.5YRで彩度4、明度4、発達中度の細塊状構造、未風化小円礫を含む。構造面に鉄および腐植の被膜が認められる。ち密度2.4で中、pH(H₂O) 5.7、下層へは漸変。

第3層は10～14cmで腐植含量5%内外、土性はLである。色は10YRで彩度4、明度4、発達中度の細塊状構造、未風化小円礫を含む。構造面に鉄および腐植の被膜が認められる。ち密度2.2で中、pH(H₂O) 5.9、下層の境界は明瞭である。

第4層は13～16cmで腐植含量2%内外、土性はCLである。色は10YRで彩度4、明度5、発達弱度の角塊状構造、未風化小円礫に頗る富む。ち密度3.1で極密、pH(H₂O) 5.8、下層との境界は明瞭である。

第5層は50cm以上の礫層、色は10YRで彩度・明度5、酸化沈積物含む。

代表的断面形態

(所在地) 宗谷郡猿払村鬼志別

第1層	0～12cm	腐植に頗る富む黄褐(10YR3/4)のC、発達弱度の細塊状構造、未風化小円礫を含む。ち密度2.0で中、pH(H ₂ O) 5.5、調査時の湿り半乾、境界平坦明瞭。
第2層	12～34	腐植に富む黄褐(7.5YR4/4)のC、発達中度の細塊状構造、未風化小円礫含む。ち密度2.4で中、pH(H ₂ O) 5.7、調査時の湿り半乾、境界波状漸変。
第3層	34～50	腐植を含む黄褐(10YR4/4)のL、発達中度の細塊状構造、未風化小円礫含む。ち密度2.2で中、pH(H ₂ O) 5.9、調査時の湿り半乾、境界平坦明瞭。
第4層	50～66	腐植を含む黄褐(10YR5/4)のCL、発達弱度の角塊状構造、未風化小円礫に頗る富む。ち密度3.1で極密、pH(H ₂ O) 5.8、調査時の湿り半乾、境界平坦明瞭。
第5層	60～	腐植を欠く黄褐(10YR5/5)の礫層、ち密度3.1で極密、調査時の湿り湿、酸化沈積物含む。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 重量%	粒 径 組 成 %				土 性	現地容積重g	比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐 植 %
				粗 砂	細 砂	シルト	粘 土							
1	0～12	3.7		7.6	14.9	39.0	38.5	LiC	1.20	2.4	7.48	0.38	19.7	12.9
2	12～34	4.0		12.6	21.9	38.4	27.1	LiC	1.49	2.7	3.63	0.17	21.4	6.2
3	34～50	4.2		26.0	26.2	33.1	14.7	L	1.51	2.8	2.75	0.11	25.0	4.7
4	50～66	2.7		18.3	31.6	31.6	18.5	CL	1.89	2.8	1.16	0.03	38.7	2.0

層位	P H		置換酸度 Y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g				石灰飽和度 %	磷酸吸収係数	有効遊離酸 mg/100g
	H ₂ O	K ₂ O			CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O			
1	5.5	4.2	2.04	29.91	6.38	1.61	0.55	0.20	21.3	6.46	4.0
2	5.7	4.4	2.35	25.77	10.6	0.27	0.19	0.21	4.1	11.42	0
3	5.9	4.7	1.11	22.42	0.41	0.13	0.12	0.19	1.8	8.77	0
4	5.8	4.6	10.8	17.87	0.61	0.15	0.12	0.28	3.4	7.03	0

A-2 他の土壌統との関係

本土壌統に類似する統としては小石統と残芽野統があるが、前者は堆積様式、後者は母材が異なるので区分される。

A-3 母 材

固結水成岩（砂岩、砂礫岩）

A-4 堆積様式

洪 積（海 成）

B 地 形

波状性段丘地

C 気 候

春季は降雨少なく強風と相まって発芽不良、初期生育不振を招く。しかし7月上旬より雨量は多目となり、この時期が牧草の収穫期に当たるため刈取り後の乾燥を妨げ、品質低下の原因となっている。

D 畜生および利用状況

大部分草地として利用されている。

E 農業上の留意事項

表土は浅く、腐植および養分分極欠き、強酸性を呈している。したがって堆肥の投入、石灰・磷酸を投入し土壌改良を行なうべきである。

F 分 布

北海道宗谷郡猿払村

調査および記載責任者

奥 村 純 一

（北海道天北農業試験場）

年 月 日

昭和47年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡 略 分 級 式
猿 払 区	III t II d k p f n e

明度3、細粒状構造で発達程度は弱度のものが多い。ち密度2.0~2.3で中、pH(H₂O)5.4前後、下層との層界は不規則漸変である。

第2層は厚さ1.7~2.2cm、腐植含量4.2%内外、土性LiCである。色は1.0YRで彩度6、明度4で小円礫を含む。発達中度の細粒状構造、細孔あり、ち密度2.0~2.5でやや密、pH(H₂O)5.4前後、酸化沈積物有り、下層との層界は不規則漸変。

第3層は厚さ3.0~4.0cm、腐植含量2%内外、土性はLiCである。色は7.5YRで彩度・明度とも6、小円礫を含む。発達中度の粒状構造、細小孔富む。ち密度は2.0~2.5でやや密、pH(H₂O)5.6前後、酸化沈積物含む。下層との層界は不規則漸変。

第4層、腐植を欠く、土性はLiCである。色は1.0YRで彩度6、明度5、平板状構造、ち密度2.5~2.8で堅密、小円礫を含む。酸化沈積物を含む。

代表的断面形態

(所在地) 猿払村上猿払

第1層	0~2.0cm	腐植に富む黒色(7.5YR3/1)のLiC、礫なく、発達弱度の細粒状構造、ち密度2.0~2.3で中、pH(H ₂ O)5.4、調査時の湿り半乾、層界不規則漸変
第2層	2.0~4.0	腐植含む黄褐色(1.0YR4/6)のLiC、小円礫を含む、発達中度の塊状構造、ち密度2.0~2.5でやや密、pH(H ₂ O)5.4、調査時の湿り半乾、酸化沈積物有、層界不規則漸変
第3層	4.0~5.5	腐植含む黄褐色(7.5YR6/6)のLiC、小円礫を含む、発達中度の粒状構造、ち密度2.0~2.5でやや密、pH(H ₂ O)5.6、調査時の湿り半乾、酸化沈積物含む、層界不規則漸変
第4層	5.5~	腐植を欠く黄褐色(1.0YR5/6)のLiC、小円礫を含む、平板状構造、ち密度2.5~2.8で堅密、酸化沈積物含む

代表的断面の分析成績

層位	採取部 位 cm	水分 %	腐植 量 %	粒 径 組 成 %				土 性	現密腐植 g	比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素比	腐 植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~2.0	4.2		7.5	13.8	37.3	41.4	LiC	(A)15.4	2.63	5.12	0.42	12	9.4
2	2.0~4.0	3.9		8.8	14.3	37.3	39.6	LiC	(A)12.6 16.2	2.88	2.32	0.16	15	4.3
3	4.0~5.5	3.7		6.9	17.6	33.0	42.5	LiC	16.3	2.88	1.06	0.08	13	2.0

層位	P H		置換酸度 Y ₁	塩基置換 容量 me/100g	置 換 性 塩 基 me/100g				石 灰 飽和度 %	燐吸収 係 数	有効陽離子 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O			
1	5.4	4.6	9.8	27.32	8.51	2.13	0.15	0.23	31.2	10.42	0.2
2	5.4	4.4	20.6	19.07	2.39	1.06	0.09	0.25	12.5	7.39	0
3	5.6	4.4	27.8	19.59	2.48	1.06	0.12	0.45	12.6	9.38	0

A-2 他と土壌統との関係

本土壌統に類似する統としては猿払統があるが、母材、堆積様式を異にするので区分した。

A-3 母 材

固結水成岩（頁岩）

A-4 堆積様式

海成洪積

B 地 形

波状丘陵地

C 気 候

春季は降雨少なく強風と相まって発芽不良、初期生育不振を招く。しかし7月上旬より雨量は多目となり、この時期が牧草の収穫期に当たるため刈取り後の乾燥を妨げ、品質低下の原因となっている。

D 植生および利用状況

かつて畑地として利用されていたところもあるが、現在離農跡地としてほとんど放置されている

E 農業上の留意事項

表層にのみ腐植を有する土壌であるから、まず草地造成法の選択に留意し、施肥は造成時に磷酸、石灰の多用、経年に伴って窒素の増肥を必要とする。

F 分 布

北海道宗谷郡猿払村

調査および記載責任者

奥 村 純 一

（北海道立天北農業試験場）

年 月 日

昭和47年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡 略 分 級 式
上猿払統 — 上猿払区	■ nll t p w f a 3

② 土壌区別説明

上猿払統 — 上猿払区

示性分級式 (畑)

土壌生産力可能性等級	表土の厚さ	表土の層の深さ	耕耘の難易	表土の粘着性	表土の風乾の硬さ	土壌の透水性	土壌の保湿度	土壌の自然肥力	土壌の固保力	土壌の塩基状態	養分交換性	苦土含量	加里含量	有効態量	微酸要素	障害物質の有無	物理的障害性	増冠水の危険度	地すべりの危険度	傾斜	自然傾斜	人為傾斜	侵入傾斜	耐水蝕性	耐風蝕性	
t d g p				w	f	n								i	a	s						e				
ⅣⅡⅠⅠⅡⅢ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	
簡略分級式 ⅢnⅡtpwfas																										

A. 土壌区の特徴

この土壌区は上猿払統に属する。作土は15~20cmで中庸。有効土層は1mでやや深い。強粘質のため農具の使用にあたって抵抗がある。保肥力大、燐酸固定力は作土、心土とも中庸である。養分は苦土に富むが加里、燐酸に乏しい。特殊の障害性は存在しない。地形は段丘上の緩傾斜地である。

B. 植生および利用状況

一度畑地(牧草を含む)に供されたこともあるが、現在離農跡地として放置されている。

C. 地力保全上の問題点

普通畑地として利用する場合、一部侵蝕の恐れがあるが、草地に利用するときはその恐れはない。草地造成時の燐酸、石灰多投は高収に結びつく。

D. 分 布

北海道宗谷郡猿払村土猿払

調査および記載責任者

奥村 純一

年 月 日

昭和47年3月31日

浅 茅 野 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は13~16cm、腐植含量10%内外、土性はS Lである。色は10 YRで彩度3、明度

2、発達弱度の細粒状構造、ち密度1.8~2.2で中、pH (H₂O) 5.2前後、境界漸変。

第2層は1.0~1.5cm、腐植含量8%内外、土性はSLである。色は7.5YRで彩度4、明度4、発達程度中度の細粒状構造、ち密度2.0~2.2で中、pH (H₂O) 5.8前後、下層との境界は漸変。

第3層は2.0~2.3cm、腐植含量2%内外、土層はLSである。色は1.0YRで彩度6、明度4、単粒状構造、ち密度2.0~2.2で中、pH (H₂O) 5.7前後、下層との境界は漸変。

第4層、腐植を欠く、土性はSである。色は1.0YRで彩度6、明度5、単粒状構造、ち密度2.0~2.2で中。

代表的断面形態

(所在地) 宗谷郡猿払村浅茅野

第1層	0~1.5cm	腐植に富む黄褐 (1.0YR2/3) のSL、発達弱度の細粒状、ち密度2.0で中、pH (H ₂ O) 5.8、調査時の湿り半乾、境界判然
第2層	1.5~3.0	腐植に富む黄褐 (7.5YR4/4) のSL、発達中度の細塊状構造、ち密度2.1で中、pH (H ₂ O) 5.8、調査時の湿り半乾、境界漸変
第3層	3.0~5.0	腐植を含む黄褐 (1.0YR4/6) のLS、単粒状構造、ち密度2.1で中、pH (H ₂ O) 5.7、調査時の湿り半乾、境界漸変
第4層	5.0~	腐植を欠く黄褐 (1.0YR5/6) のS、単粒状構造、ち密度2.0で中、調査時の湿り半乾

代表的断面の分析成績

層位	採取部 cm	水分 %	礫含量 重量%	粒 径 組 成 %				土性	現地容積 重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~1.5	3.5		3.97	3.02	15.6	1.45	SL	142	2.4	5.92	0.24	2.4	10.9
2	1.5~3.0	4.2		4.90	3.04	12.6	8.0	SL	138	2.6	4.23	0.19	2.2	7.8
3	3.0~5.0	3.0		6.83	23.7	6.4	1.6	LS	165	2.7	1.29	0.08	1.7	2.4

層位	P H		置換酸度 度Y ₁	塩基置換 容量 me/100g	置 換 性 塩 基 me/100g				石 灰 飽和度 %	磷酸吸収 係 数	有効陽離 子 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O			
1	5.2	4.6	9.3	19.07	3.72	0.27	0.08	0.09	1.95	1.482	1.9
2	5.8	5.0	2.5	15.98	3.46	0.27	0.03	0.05	2.16	1.457	0
3	5.7	5.2	1.5	7.42	0.64	0.11	0.02	0.03	8.6	1.014	0

A-2 他の土壌統との関係

本土壌統に類似する統としては猿払統があるが、土性が強粘質で下層に斑鉄が出るので区分される。隣接する統にはベニヤ統およびモケウニ統がある。

A. 土壤区の特徴

この土壤区は浅茅野統に属する。表土の厚さは30cm内外、有効土層50cm内外でやや浅い。表土は壤質で粘質が弱いので農具使用は比較的容易である。過湿のおそれは少ないが、一時的に過干のおそれがある。保肥力、磷酸固定力共中庸であるが、塩基の状態は不良である。磷酸に欠乏している。地形はほぼ平坦で水蝕のおそれはなく、また特殊の障害性はない。

B. 植生および利用状況

大部分草地として利用されている。

C. 地力保全上の問題点

大部分排水の必要はないが、一部に排水不良地があるので暗渠を必要とする。強酸性を呈するので石灰の施用、また磷酸に欠乏しているので磷酸の施用が大切である。

D. 分 布 北海道宗谷郡猿払村浅茅野からシネシンコまでの海岸段丘地

調査および記載責任者	奥村 純一
年 月 日	昭和47年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
シネシンコ区	III pfn II tdw

② 土壤区別説明

浅茅野統 — シネシンコ区

示性分級式 (畑)

土 壤 生 産 力 の 可 能 性 等 級	表 土 の 厚 さ	耕 転 の 難 易	耕 転 の 粘 着 性	表 土 の 風 乾 の 乾 湿	土 地 の 水 性	透 水 性	自 然 潤 肥 度	保 固 力	保 固 力 状 態	養 分 塩 基 濃 度	置 換 性 灰 土 含 量	有 効 苦 土 里 酸 要 素	微 酸 性	障 害 物 質 の 有 無	災 害 的 障 害 性	地 冠 水 の 危 険 度	傾 斜 の 危 険 度	傾 斜 方 向	侵 入 傾 斜	耐 水 蝕 性	耐 風 蝕 性														
tdgp	w			w	f			n					i	a	s																				
III	II	II	I	III	3	2	2	II	3	2	2	III	1	4	3	III	3	2	2	3	1	3	I	1	1	I	1	1	I	1	—	I	1	1	1
簡略分級式 III pfn II tdw																																			

A. 土壤区の特徴

この土壤区は浅茅野統に属する。表土の厚さ20cm、有効土層の深さ50cm内外でともに中位、細粒質であるため粘着性強く、かつ通気水性不良のため耕耘に困難をとめない過湿のおそれがある。

保肥力、磷酸固定力大、置換性加里・苦土は中位であるが、石灰に欠乏し、強酸性を呈する。侵蝕のおそれなく特殊の障害性はない。

B. 植生および利用状況

大部分シラカバ、ハンノキ、ササの原野、一部放牧地として利用されている。

C. 地力保全上の問題点

排水施設の完備が先決である。また表土・下層土とも石灰・磷酸に欠乏しているので土改資材の施用が必要である。とくに草地造成に際しては磷酸の多投が大切である。

D. 分 布

猿払村猿払、浜鬼志別、シネシンコの一部

調査および記載責任者 奥 村 純 一 (北海道立天北農業試験場)

年 月 日 昭和47年3月31日

カ ム イ 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は20～23cmで腐植含量3.6%、土性は腐植土、色は1.0YRで彩度2、明度2、疎なく連結状構造、ち密度は7で頗る疎である。pH(H₂O)4.5前後で下層へは漸変する。

第2層は厚さ15～20cmで腐植含量7.6%、土性は泥炭、色は7.5YRで彩度3、明度2、疎なく連結状構造、ち密度は1.0で頗る疎である。管状の酸化沈植物を含む。pH(H₂O)4.4前後、下層との境界は明瞭である。

第3層は厚さ30cm以上で腐植含量6.3%、土性はH.C、色は2.5GYで彩度1、明度5、疎なく固状構造、グライ層となっていてち密度は頗る疎である。pH(H₂O)4.8である。

代表的断面形態

(所在地) 宗谷郡猿払村浅茅野

第1層	0～22cm	腐植土で黒色(1.0YR2/2)、疎なく連結状構造、ち密度7で頗る疎、pH(H ₂ O)4.5、調査時の湿り潤、境界漸変
第2層	22～40	泥炭土で黄褐色(7.5YR2/3)、疎なく連結状構造、ち密度1.0で頗る疎、pH(H ₂ O)4.4、調査時の湿り潤、境界明瞭
第3層	40～	腐植に富む青灰(2.5GY5/1)、疎なく固状腐熟、ち密度1.0で頗る疎、pH(H ₂ O)4.8、調査時の湿り湿

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒 径 組 成 %				土性	現地容積重 g	比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
			粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~22	4.9	—	—	—	—	—	—	20.98	0.92	22.8	36.1	
2	22~40	6.6	—	—	—	—	103	—	44.07	0.96	45.9	75.8	
3	40~60	4.0	1.2	7.0	34.1	57.7	HC	149	2.7	3.64	0.19	19.2	6.3

層位	pH		置換酸度 Y ₁	塩基置換容量 me/100g	置 換 性 塩 基 me/100g				石 灰 飽 和 度 %	磷酸吸収係 数	有効遊離酸 mg/100g
	H ₂ O	Kcl			CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O			
1	4.5	4.0	10.5	48.46	5.85	2.66	0.70	0.75	12.1	49.4	2.3
2	4.4	3.8	18.9	89.49	6.81	2.13	0.18	0.60	7.6	122.0	1.0
3	4.8	3.8	52.5	33.33	2.44	2.13	0.18	0.32	7.3	83.8	1.7

A-2 他の土壌統との関係

本土壌統に類似する統としてはボロ統があるが、浅い位置から鉄質土となっているので区分される。隣接する統には浅茅野統、猿払統がある。

A-3 母 材

固結水成岩（頁岩）

A-4 堆積様式

海成洪積

B 地 形

丘陵地に囲まれた凹地である。

C 気 候

春季に降雨少なく強風と相まって発芽不良、初期生育不振を招く。しかし7月上旬より雨量は多目となり、この時期が牧草の収穫期に当たるため刈取り後の乾燥を妨げ、品質低下の原因となっている。

D 植生および利用状況

湿地なため森林およびササ地なため未利用地が多い。

E 農業上の留意事項

排水施設の完備が先決である。

F 分 布

北海道宗谷郡猿払村浅茅野、カリベツ

調査および記載責任者

奥 村 純 一

（北海道立天北農業試験場）

年 月 日

昭和47年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
カムイ区	IVw III n II f a

② 土壤区別説明

カムイ統 — カムイ区

示性分級式 (畑)

土壤生産力可能性等級	表土の厚さ	表土の粘着性	表土の乾土の硬さ	地透水性	保湿度	自然肥力	固肥力	土層の塩基状態	置換性	苦土含量	加里含量	有効微量要素	微酸度	有害物質の有無	物理的障害性	増冠水の危険度	地すべりの危険度	自然傾斜	人為傾斜	耐水蝕性	耐風蝕性															
t d g p			w		f	n							i	a	s																					
IV	I	I	I	I	1	1	1	IV	3	1	3	II	1	1	3	III	3	1	1	2	1	4	I	1	1	II	2	1	I	1	—	—	I	1	1	1
簡略分級式		IVw III n II f a																																		

A. 土壤区の特徴

この土壤区はカムイ統に属する。表土の厚さ40cm、有効土層1m以上で深い。表層が有機物に富んでいるため耕耘は容易である。過湿のおそれがある。加里・苦土に富むが、石灰に欠乏し、強酸性を呈する。侵蝕のおそれなく、特殊の障害性はない。

B. 植生および利用状況

大部分エゾマツ、ササなどの原野である。

C. 地力保全上の問題点

地形平田なので侵蝕などに関する問題は少ない。排水施設の完備が先決である。

D. 分布

猿払村のカムイ沼周辺

調査および記載責任者

奥村 純一

年 月 日

昭和47年3月31日

べ 二 ヤ 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ3～5cmで腐植含量6%内外、土性はSLである。色は10YRで彩度1～2、明度2～3、単粒構造、ち密度1.0前後で粗、pH(H₂O)5.5前後、下層との境界は平坦明瞭である。

第2層は1.0cm内外で腐植を欠く、土性はLSである。色は7.5YRで彩度1～2、明度6～7、単粒構造、ち密度1.0前後で粗、pH(H₂O)5.0前後、下層との境界は波状漸変。

第3層は1.5～2.0cmで腐植を欠く。土性はLSである。色は2.5YRで彩度6～8、明度4～5、単粒構造、ち密度2.5で密、pH(H₂O)5.3前後、下層との境界は波状漸変。

第4層は1.5～2.0cmで腐植を欠く。土性はLSである。色は5YRで彩度は3～4、明度6～7、単粒構造、ち密度2.5で密、pH(H₂O)5.4前後、下層との境界波状漸変である。

第5層は地表下4.0～5.0cm以下で腐植を欠く。土性はLS、土色は7.5YRで彩度3～4、明度6～7、単粒構造、ち密度2.0～2.5で中。

代表的断面形態

第1層	0～3cm	腐植に富む黄褐(10YR2/3)のLS、単粒構造、ち密度は1.0で粗 pH(H ₂ O)は5.5、調査時の湿り半乾。
第2層	3～1.1cm	腐植を欠き、灰褐(7.5YR6/2)のLS、単粒構造、ち密度は1.0で粗、pH(H ₂ O)は5.0、本層は洗脱層、調査時の湿り半乾。
第3層	1.1～2.9cm	腐植を欠き、赤(2.5YR4/6)のLS、単粒構造、ち密度は2.5で密(集積層でオルトシユタインを形成)、pH(H ₂ O)は5.3、調査時の湿り半乾。
第4層	2.9～4.4cm	腐植を欠き、黄褐(5YR6/4)のLS、単粒構造、ち密度は2.5で密 pH(H ₂ O)5.4、調査時の湿り半乾。
第5層	4.4～9.9cm	腐植を欠き、黄褐(7.5YR7/3)のLS、単粒構造、母材に達する。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含 量重 量%	粒 径 組 成 %				土性	現地 容積 重%	真 比 重	全 炭 素 %	全 窒 素 %	炭 素 率
				粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0～3	2.0		15.8	72.8	0.3	10.0	LS		2.52	8.65	0.35	24.6
2	～1.1	1.1		17.0	77.0	0.4	5.7	LS		2.74	0.50	0.02	25.0
3	～2.9	1.9		17.9	75.8	Tr	7.0	LS		2.72	0.59	0.02	24.5
4	～4.4	1.3		13.7	84.2	Tr	2.0	LS		2.73	0.32	0.03	10.7
5	～9.9	0.8		1.4	96.6	Tr	2.0	LS		2.73	0.18	0.02	6.0

層位	pH		置換酸度 Y ₁	塩基置換容 量 me/100g	置換性塩基 me/100g				石灰飽和度 %	磷酸吸収 係 数	有効態 磷酸 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O			
1	5.5	4.5	1.3	15.2	7.6	28.6	0.32	0.24	35.7	443	0.9
2	5.0	4.1	2.8	4.2	1.9	0.90	0.06	0.10	44.7	—	Tr
3	5.3	4.3	3.0	2.3	1.6	0.15	0.05	0.11	94.4	—	Tr
4	5.4	5.2	0.1	2.6	0.7	0.31	0.05	0.12	26.9	—	Tr
5	5.9	5.9	—	1.3	0.6	0.20	0.08	0.09	42.0	—	Tr

A-2 他の土壌統との関係

本土壌統に類似する統としては、浅茅野統であるが、堆積様式、土性などを異にするので区分した。

A-3 母 材 海 砂

A-4 堆積様式 砂 丘

B 地 形 平 坦

C 気 候

春季は降雨少なく強風と相まって発芽不良、初期生育不振を招く、しかし、7月上旬より雨量は多目となり、この時期が牧草の収穫期に当たるため刈取り後の乾燥を妨げ、品質低下の原因となっている。

D 植生および利用状況

現在はほとんど利用されていないが、一部草地として利用しているところもある。

E 農業上の留意事項

我道唯一のポドソール地帯である。従つてこれの農地化は関心事であるが、養分の不足が著しいので、不耕起造成方式をとり、堆厩肥尿の還元や濃密な施肥対策が望まれる。

F 分 布 北海道宗谷郡猿払村

調査および記載責任者 奥村 純一（北海道立大北農業試験場）

年 月 日 昭和47年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡 略 分 級 式
ベニヤ統 — ベニヤ区	IV(w) III t r u II

② 土壌区別説明

ベニヤ統 — ベニヤ区

示 性 分 級 式 (畑)

土表有表耕	土	自	養	障	災	傾	侵
壤 生 産 力 の 可 能 性 厚 等 級	効 土 土 の 層 の 厚 さ	(表土の風乾の硬さ) (表土の粘着性) (透地の水の乾性) (保水の潤性) (湿然肥沃度)	(固土層の塩基状態) (分換性の石灰含量) (置換性の苦土含量) (有効態量) (微酸量) (有害物質の有害性)	(物理的障害) (有害物質の有害性)	(増冠水の危険度) (地すべりの危険度)	(自然傾斜) (人為傾斜)	(侵入為の傾斜) (耐風耐水耐蝕性)
t d g P	w	f	n	i	a	s	e
IV III I [I 1 1 1 (IV) 1 3 (2) III 3 1 3 III 3 3 3 3 1 2 I 1 1 I 1 1 I 1 -- II 1 1 2							
簡略分級式	IV(w)	III	f n	II	e		

A 土壤区の特徴

この土壤区はベニヤ雑に属する。表土の厚さは10~15cm、有効土層は1m以上で深い。表土は砂質で粘着性は弱く耕起、砕土は容易である。下層10~30cmは酸化沈積物(ポドソールの集積層に該当)がありオルトシュタインを形成し植物根の伸入を阻害している。透水性大、保水性小で過干のおそれあり。

保肥力、固定力とも小さく土層の塩基状態は不良である。磷酸含量少なく、他の養分も小さい。

B 植生および利用状況

現在殆んど未利用地であるが、一部草地として利用されているところもある。

C 地力保全上の問題点

開発利用する場合は草地以外にないが、造成法は表層攪拌方式をとることが必要で、そのとき磷酸肥料の多投が肝要である。

D 分 布 北海道宗谷郡猿払村浅茅野台地海岸線沿。

記載責任者 奥村 純一

年 月 日 昭和47年3月31日

鬼 志 別 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層の厚さは20~22cm、腐植含量16%内外、土性はL i Cである。色は10YRで彩度

2、明度3、発達弱度の細塊状構造、ち密度16で疎、pH(H₂O)は5.8、下層との境界は明瞭である。

第2層の厚さは18~20cm、腐植含量24%内外、土性はLiCである。色は10YRで彩度2、明度2、発達中度の細塊状構造、ち密度15で疎、pH(H₂O)は5.7、下層との境界は明瞭である。

第3層の厚さは12~15cm、腐植含量6%内外、土性はLiCである。色は10YRで彩度2、明度5、発達弱度の細塊状構造、ち密度14で疎、pH(H₂O)は5.5、下層との境界は明瞭である。

第4層の厚さは22~25cm、腐植含量4%内外、土性はLiCである。色は2.5Yで彩度2、明度5、固化状、酸化沈積物あり、ち密度12で疎、pH(H₂O)は5.3、下層との境界は判然である。

第5層は30cm以上、腐植含量は2%内外、土性はLiCである。色は2.5GYで彩度1、明度4、固化状、酸化沈積物含む。ち密度8ですこぶる疎。

代表的断面形態

(所在地) 宗谷郡猿払村猿払

第1層	0~22cm	腐植にすこぶる富む灰褐色(10YR3/2)のC、発達弱度の細塊状構造、ち密度16で疎、pH(H ₂ O)5.8、調査時の湿り半乾、境界平坦明瞭
第2層	22~40cm	腐植土で黒(10YR2/2)のC、発達中度の細塊状構造、ち密度15で疎、pH(H ₂ O)5.7、調査時の湿り半乾、境界平坦明瞭。
第3層	40~55cm	腐植に富む灰褐色(10YR5/2)のC、発達弱度の細塊状構造、ち密度14で疎、pH(H ₂ O)5.5、調査時の湿り半乾、境界は平坦明瞭。
第4層	55~80cm	腐植を含む灰色(2.5Y5/2)のC、固化状、ち密度12で疎、pH(H ₂ O)5.3、調査時の湿り湿、境界は平坦判然。
第5層	80~	腐植を欠く青灰(2.5GY4/1)のC、固化状、ち密度8ですこぶる疎

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含 量重 量%	粒 径 組 成 %				土性	現地 容積 重g	真 比 重	全 炭 素 %	全 窒 素 %	炭 素 率	腐 植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~22	4.9		0.4	28.4	44.4	26.7	LiC	117	2.3	9.32	0.74	12.6	16.0
2	22~40	5.9		0.1	14.2	44.5	41.2	LiC	113	1.9	14.06	1.06	13.3	24.2
3	40~55	4.6		0.3	22.4	42.7	34.5	LiC	142	2.7	3.72	0.23	16.2	6.4
4	55~80	4.1		0.3	23.2	40.3	36.2	LiC		2.7	2.32	0.12	19.3	4.0

層位	pH		置換酸度 Y ₁	塩基置換容 量 me/100g	置換性塩基 me/100g				石灰飽和度 %	磷酸吸収 係 数	有効態 磷酸 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O			
1	5.8	4.2	10.5	40.21	11.35	3.90	0.43	0.61	28.2	2175	0
2	5.7	4.3	19.3	49.14	8.51	3.19	0.51	0.67	17.3	2224	0
3	5.5	4.0	58.6	39.43	4.79	3.19	0.16	0.46	12.1	1508	0
4	5.3	3.9	47.8	36.43	5.59	5.32	0.18	0.52	11.7	863	0

A-2 他の土壌統との関係

本土壌統に類似する統としてはボロ統があるが母材が異なるので区分される。

A-3 母 材 固結水成岩（砂岩、頁岩）

A-4 堆積様式 水積（河成）

B 地 形 平 坦

C 気 候

春季は降雨少なく強風と相まつて発芽不良、初期生育不振を招く、しかし7月上旬より雨量は多目となり、この時期が牧草の収穫期に当たるため刈取り後の乾燥を妨げ、品質低下の原因となっている。

D 植生および利用状況

一部草地として利用されているが、大部分は、ヨシ、ササなどの原野である。

E 農業上の留意事項

河川改修、排水を実施するのが先決である。

F 分 布 北海道宗谷郡猿払村

調査及び記載責任者 奥村 純一（北海道立天北農業試験場）

年 月 日 昭和47年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
鬼 志 別 区	III f II t p w n a

② 土壌区別説明

鬼 志 別 統 一 鬼 志 別 区

示 性 分 級 式 (畑)

土	表	有	表	耕	土	自	養	障	災	傾	侵																					
土	効	土	(表	(表	地	(透	(保	(湿	然	(保	(固	(土	(置	(((有	(微	(酸	(有	(物	(增	(地	(自	(傾	(人	(侵	(耐	(耐				
生	土	土	土	土	土	水	水	潤	肥	肥	定	塩	石	苦	加	燐	量	害	害	害	水	す	然	斜	為	水	風	耐	耐			
産	の	の	の	の	の	乾	乾	沃	沃	力	力	基	灰	土	里	酸	要	性	性	性	危	の	傾	傾	傾	蝕	蝕	蝕	蝕	蝕		
力	厚	含	難	粘	乾	性	性	度	度	力	力	基	灰	土	里	酸	要	性	性	性	危	の	傾	傾	傾	蝕	蝕	蝕	蝕	蝕		
可	深	量	易	性	性	性	性	度	度	力	力	基	灰	土	里	酸	要	性	性	性	危	の	傾	傾	傾	蝕	蝕	蝕	蝕	蝕		
能	さ	さ	量	易	性	性	性	度	度	力	力	基	灰	土	里	酸	要	性	性	性	危	の	傾	傾	傾	蝕	蝕	蝕	蝕	蝕		
性	さ	さ	量	易	性	性	性	度	度	力	力	基	灰	土	里	酸	要	性	性	性	危	の	傾	傾	傾	蝕	蝕	蝕	蝕	蝕		
等	さ	さ	量	易	性	性	性	度	度	力	力	基	灰	土	里	酸	要	性	性	性	危	の	傾	傾	傾	蝕	蝕	蝕	蝕	蝕		
級	さ	さ	量	易	性	性	性	度	度	力	力	基	灰	土	里	酸	要	性	性	性	危	の	傾	傾	傾	蝕	蝕	蝕	蝕	蝕		
	t	d	g	p	w	f	n	i	a	S	e																					
III	II	I	I	II	3	2	2	II	1	2	2	III	1	4	2	II	1	1	1	3	1	2	I	1	1	II	2	1	I	1	1	1
簡略分級式												III f II t p w n a																				

A 土壤区の特徴

この土壤区は鬼志別統に属する。表土の厚さは20～22cm、有効上層は1mで深い。本区は主に鬼志別川、猿払川の上流域の河川流域に発達した沖積土壌である。保肥力、固定力とも大、塩基の状態は中位、置換性石灰、苦土、加里は多いが、有効態燐酸、酸度も中庸である。春先の融雪期、多雨期は冠水の恐れあり。特殊の障害性なし。

B 植生および利用状況

一部草地として利用されているが、大部分は未利用地として放置。

C 地力保全上の問題

河川改修とともに排水を実施することが先決で、これらの解決後は石灰、燐酸資材の施用が必要である。

D 分 布

北海道宗谷郡猿払村鬼志別、知来別、上猿払、猿払

調査および記載責任者 奥村 純一

年 月 日 昭和47年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
知 来 別 区	III w u II t p a

② 土壤区別説明

鬼 志 別 統 一 知 来 別 区

示 性 分 級 式 (畑)

土表有表耕	土	自	養	障	災	傾	侵
土 生 産 力 可 能 性 厚 等 級	効 土 の 層 の 含 深 さ	耘 の 難 易 量	(表土の風乾の硬さ) (表土の粘着性) (地透水性) (保湿度) (湿潤度)	然肥沃 (保肥力) (固定力) (土層の塩基状態) (分層の塩基状態) (置換性石灰含有量)	(有効態量) (微酸量) (有害物質の有害性)	(物理的障害の有害性) (増冠水の危険度) (地すべりの危険度)	(自然傾斜) (人為傾斜) (侵蝕度) (耐風蝕性)
t d g p	w	f	n	i	a	S	e
ⅢⅡⅠⅠⅡⅢ	ⅢⅡⅢ	ⅠⅡⅢ	ⅢⅠⅠⅢ	ⅠⅠⅠⅠ	ⅡⅡⅠ	ⅠⅠⅠ	ⅠⅠⅠⅠ
簡略分級式		Ⅲw n		Ⅱt p a			

A 土壤区の特徴

この土壤は鬼志別統に属する。表土の厚さは15cm内外、有効土層は1m以上で深い。本区は主に狩別川、鬼志別川、知来別川の流域に発達した土壤で前記鬼志別区と隣接し、ほぼ同一堆積様式であるが、20cm以下より酸化沈積物があるので区別したものである。保肥力大、固定力小、塩基の状態良好で自然肥沃度は高い。置換性塩基は多いが、有効磷酸は少ない。通気水性不良、過湿のおそれがある。早春の融雪期、多雨時は冠水の災害を受ける。

B 植生および利用状況

一部草地として利用しているが、大部分は未利用地である。

C 地力保全上の問題点

排水不良が多く、かつ頻繁に冠水の被害を被るので、河川改修、排水の完備を必要とする。

D 分 布

北海道宗谷郡猿払村知来別、鬼志別、狩別

調査及び記載責任者 奥村 純一

年 月 日 昭和47年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
ポロナイ区	III w n II t p f a

② 土壤区別説明

鬼志別統一ポロナイ区

示性分級式(畑)

土壤生産力可能性等級	表土の厚さ	表土の含土量	耕土の粘着性	表土の乾硬性	土の透水性	地水の湿度	保肥力	自然肥度	保肥力	土壌の固定力	分層の豊富性	置換性の含有量	強酸性的	微酸性	有害物質の含有性	物理的障害の有無	増冠水の危険度	地すべりの危険度	自然傾斜の方向	人為的傾斜	侵入的傾斜	耐水蝕性	耐風蝕性													
t d e p				w			f			n					i	a	s					e														
III	II	I	I	II	3	2	2	III	2	2	2	II	1	2	2	III	1	1	2	3	1	3	I	1	1	II	2	1	I	1	—	—	I	1	1	1
簡略分級式		III w n		II t p f a																																

A 土壤区の特徴

この土壤区は鬼志別統に属する。表土の厚さは20cm内外、有効土層は1m以上で深い。本区は主に猿払川上流域に分布するもので、地下水位高く、湿性地となっている。保肥力大で固定力は小さい。腐基の状態は中程度で、自然肥度度は中位である。強酸性を呈し、養分は少ない。融雪期、多雨時は冠水を被る。特殊の障害性はない。

B 植生および利用状況

殆んど未利用原野である。

C 地力保全上の問題点

地下水位高く、排水不良地であること。増冠水の頻度が甚だ多いので、河川改修、排水の完備が先決である。また強酸性であるため、石灰の施用が肝要である。

D 分布

北海道宗谷郡猿払村上猿払

調査及び記載責任者 奥村 純一
 年 月 日 昭和47年3月31日

ポ 口 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ8～10m、低位泥炭土である。色は10YRで彩度1、明度2である。構成植物はヨシで分解良好である。ち密度6ですこぶる疎、pH(H₂O)5.2、下層への境界は漸変。

第2層は30～35cm、低位泥炭土である。色は7.5YRで彩度3、明度3である。構成植物はヨシで分解はやゝ良好である。ち密度8ですこぶる疎、pH(H₂O)4.3、下層への境界は漸変。

第3層は50cm以下、低位泥炭土である。色は7.5YRで彩度2、明度3である。構成植物はヨシで分解はやゝ良好である。ち密度4ですこぶる疎。

代 表 的 断 面 形 態

(所在地) 宗谷郡猿払村浅茅野

第1層	0～8cm	ヨシを構成植物とする低位泥炭、色は黒(10YR2/1)、分解良好、ち密度6ですこぶる疎、pH(H ₂ O)5.2、調査時の湿り湿、境界は漸変。
第2層	8～43cm	ヨシを構成植物とする低位泥炭、色は黄褐(7.5YR3/3)、分解やゝ良好、ち密度8ですこぶる疎、pH(H ₂ O)4.3、調査時の湿り湿、下層への境界は漸変。
第3層	43～	ヨシを構成植物とする低位泥炭、色は灰褐(7.5YR3/2)分解やゝ良好ち密度4ですこぶる疎、調査時の湿り湿。

代 表 的 断 面 の 分 析 成 績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量重 量%	粒 径 組 成 %				土性	現地 容積 重g	真 比 重	全 炭 素 %	全 窒 素 %	炭 素 率	腐 植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0～8	9.4	—	—	—	—	—	—	15.7	—	—	—	—	—
2	8～43	9.2	—	—	—	—	—	—	12.3	—	—	—	—	—

層位	pH		置換酸度 Y1	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g				石灰飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態燐酸 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O			
1	5.2	4.5	3.50	25.3	22.4	6.2	1.2	—	88.5	1223	30.5
2	4.3	3.5	10.00	25.5	7.4	7.2	0.9	—	28.0	1730	3.1

A-2 他の土壌統との関係

本土壌統に類似する統としては鬼志別統があるが母材が異なるので区分される。

A-3 母材 ヨシ、ハンノキ

A-4 堆積様式 集積（低位泥炭）

B 地形 平坦

C 気候

春季は降雨少なく強風と相まって発芽不良、初期生育不振を招く、しかし7月上旬より雨量は多目となり、この時期が牧草の収穫期に当たるため刈取り後の乾燥を助け、品質低下の原因となっている。

D 植生および利用状況

一部牧草地、野草採草地として利用されているが大部分はヨシ、イワノガリヤス、ササなどの原野である。

E 農業上の留意事項

泥炭土壌なので排水施設の完備が先決である。

F 分布 北海道宗谷郡猿払村

調査及び記載責任者 奥村 純一（北海道立天北農業試験場）

年 月 日 昭和47年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡 略 分 級 式
ボロ区	IV _w II _{na}

② 土壌区別説明

ボロ統 — ボロ区

示性分級式（畑）

土表有表耕	土	自	養	障	災	傾	侵
壤 生 産 力 可 能 性 等 級	効 土 の 層 の 厚 深 さ	（表土の風乾の硬さ） （表土の粘土の粘性） （表土の風乾の硬さ） （透水性） （保湿度） （湿潤度） （自然肥沃度） （保肥力） （固定力） （土層の塩基状態） （分換性石灰含量） （置換性石灰含量） （苦土里素） （有効態量） （微酸度） （有害物質の無性） （物理的障害の無性） （増冠水の危険度） （地すべりの危険度） （自傾斜の傾斜） （人為的傾斜） （侵蝕） （耐風蝕性） （耐水蝕性）					
	t d g p	w	f	n	i	a	s e
Ⅳ	I I I I I 1(2)	IV 1 1 3	I 1 2 1	II 1 1 1 1 2 2	I 1 1	II 2 1	I 1 — — [1 1 1
簡略分級式	IVw II n a						

A 土壌区の特徴

この土壌区はボロ統に属する。表土の厚さ25cm以上、有効土層1m以上で深い。泥炭であるため耕起砕土は容易であるが、地下水位が高く、過湿のおそれが甚しい。

保肥力大、固定力小、塩基および有効磷酸に富む。

B 植生および利用状況

大部分原野であり、一部放牧または野草採草地として利用している。植生は、ヨシ、イワノガリヤス、ササが主体である。

C 地力保全上の問題点

河川改修を含めた排水施設の完備が先決である。

D 分布 猿払川、猿骨川、鬼志別川の下流域

記載責任者 奥村 純一（北海道立天北農業試験場）

年月日 昭和47年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡 略 分 級 式
猿 骨 区	IVw III i II f n a

② 土壌区別説明

ボロ統 — 猿骨区

示性分級式（畑）

土 壤 生 産 力 可 能 性 等 級	表土の厚さ	表土の層の深さ	耕耘の難易	表土の風乾の硬さ	地水の乾湿	透水性	保湿度	自然肥沃度	保肥力	固定力	土層の塩基状態	分層の塩基状態	置換性石灰含有量	苦土含有量	加里酸量	有効態リン素量	微量要素	酸害	有害物質の有無	物理的障害	増冠水の危険度	地すべりの危険度	自然傾斜の傾方	人為傾斜の傾方	侵入風蝕	耐水性	耐風蝕性		
	t	d	g	p	w	f	n	i	a	s	e																		
	IV	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	III	I	III	II	2	I	I	—	I	I	I
	簡略分級式 IV _w III _i II _{f n a}																												

A 土壌区の特徴

この土壌区はボロ統に属する。表土の厚さ2.5cm以上、有効土層の深さ1m以上で深い。泥炭であるため耕耘作業は容易であるが、地下水位高く、過湿のおそれが甚しい。下層にアカエゾマツの埋木が多いため、開発が困難である。保肥力大、固定力小、塩基および有効リン酸に富む。

B 植生および利用状況

大部分、ササ、アカエゾマツ、シラカバ、ハンノキなどの原野であるが、一部野草採草地として利用している。

C 地力保全上の問題点

排水が先決であるが、埋木が多いので開発は困難である。

D 分 布 全村の河川流域に散在する。

記載責任者 奥 村 純 一 （北海道立天北農業試験場）

年 月 日 昭和47年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
モケウニ区	IV _w III _{f n} II _a

② 土壤区別説明

ボロ統 — モケウニ区

示性分級式 (畑)

土壌生産力可能性等級	表土の厚さ	表土の層の深さ	表土の粘着性	表土の風乾性	地水の乾湿性	透水性	保水性	自然肥沃度	保肥力	固定力	土壌の塩基状態	分換の豊富	置換の量	苦土里	加酸要	有効量	微酸	有害物質の有害性	物理的障害の危険性	増冠水の危険性	地すべりの危険性	自然傾斜	人為傾斜	侵蝕	耐風蝕性	耐水蝕性									
t	d	g	p	w	f	n	i	a	s	e																									
IV	I	I	I	p	1	(2)	IV	1	1	3	III	1	3	3	III	3	1	1	2	2	3	I	1	1	II	2	1	I	1	—	—	I	1	1	1
簡略分級式		IV _w		III _{f n}		II _a																													

A 土壤区の特徴

この土壤区はボロ統に属する。表土の厚さ2.5cm以上、有効土層の深さ1m以上で深い。泥炭地であるため耕耘砕土は容易であるが、地下水位高く、過湿のおそれが甚しい。保肥力大、固定力中、苦土、加里に富むが石灰に欠乏し強酸性を呈する。

B 植生および利用状況

大部分原野のまま放置されている。

C 地力保全上の問題点

排水施設の完備、酸性矯正が必要である。

D 分布 猿払川流域に少面積が散在している。

記載責任者 奥村 純一 (北海道立天北農業試験場)

年月日 昭和47年3月31日

3 保全対策区分および説明

1) 保全対策区の説明

上掲の性状及び主要な保全対策を検討の上、次の5保全対策地区を設定した。

保全対策地区名	該 区	面積(ha)	主 な 特 徴	重 要 な 保 全 対 策
猿 払	石 炭 別 小 石 猿 払 上 猿 払	3 2 5	波状性丘陵地排水不良 下層堅密、強粘質、酸 性、浅表土	表層攪拌方式を主体とした草地造成 排水、酸性矯正、施肥改善
浅茅野	浅 茅 野 シネシニコ	1 0 4 7	平坦地、有効土層や 深い。干ばつのおそれ がある。	草地造成時における磷酸資材の多投
ベニヤ	ベ ニ ヤ	2	砂丘地。我国唯一のポ ドソル土壌、瘠薄地	農業上としての利用はあまり好まし くない。有機物の多投、草地造成は 表層攪拌方式
鬼志別	鬼 志 別 知 来 別 ボロナイ	1 4 9	平坦沖積地、排水不良 強粘質、酸性	河川改修を含めた排水施設の完備、 炭カルの施用
ボ ロ	カ ム イ ボ ロ 猿 骨 モケウニ	1 1 3	平坦、泥炭地で排水不 良、強酸性、埋木	排水、客土、酸性矯正

2) 保全対策地区別説明

< 猿 払 保 全 対 策 地 区 >

(1) 分 布 状 況

郡市町村名	面 積 (ha)	備 考(該当土壌区)
宗谷郡 猿払村	3 2 5	石 炭 別 小 石 猿 払 上 猿 払

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

① 特徴と問題点

本調査地域にもつとも広く分布するが、開墾割合は小さい。地形はほぼ波状性丘陵地で、春季融雪時に流去水の発生があるが、その被害は軽微である。

本地区は残積および洪積土壌で粘性が強く堅密であつて、通称重粘地と呼ばれている。したがつて湿潤時には過湿、干ばつ時には干害を被るなど、土壌の水分物理性は必ずしも良好とは考えられない。また浅表土で磷酸に欠乏し、強酸性を呈している。

② 営農の方向

土壌の断面形態から考えると表層にのみ養分が集積し、下層土は理化学性が劣悪であるから、草地造成は表層処理を大切にすることに尽きるわけで、この点からも転耕起方式は望ましくない。したがつて本地区がもつとも今後草地開発が進むであろうから、ローターベーター方式、重デスク方式などを採用すべきである。

つきに本地区の土壌は磷酸の極端な欠乏、強酸性であるから、磷酸の多投、石灰による十分な酸性矯正が不可欠である。また土壌の膨軟化と保水性、排水性の改善のために暗渠排水、心土破砕の工法の導入が必要と思われる。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地および対象面積	実施方法	対策資材および機械器具の種類、型式、数量
草地増成方式	石炭別 小石 猿払 上猿払325ha	表層攪拌方式を主体とした草地造成、造成時における磷酸の表層施肥	造成用農具の導入、技術指導の徹底、造成費の補助、造成時における磷酸は20Kg/10a以上
施肥改善	”	石灰、磷酸の増施、堆厩肥の還元	指導の徹底
土地改良	”	排水	工事費の補助

<浅茅野保全対策地区>

(1) 分布状況

郡市町村名	面積(ha)	備考(該当土壌区)
宗谷郡 猿払村	1047	浅茅野 シネンコ

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

① 特徴と問題点

本地区は海成洪積の段丘面に属し、平田である。本土壤は利尻ロームおよび砂礫岩を母材とした堆積物で、透水性は良好である。しかしシネシンコ区は凹地のため湿性を呈する。

天北地帯を代表する草地酪農地域で、もつともよく利用されている。

(2) 営農の方向

本地区における営農は現時点で考えるならば安定化の方向にあると云えよう。しかし、将来の酪農のあり方からみれば更に単位面積当たりの増収と一方では経営面積の拡大を図り、多頭数飼育へと進むべきであろう。

このためには、土壌中において不足する燐酸の多用を中心とした施肥法の改善と、牧草利用体系の確立が必要である。土地改良はシネシンマ区の排水を除くとその必要性はほとんどなく、むしろ堆厩肥などの有機物の多用によつて地力の増進と安定化を図るべきと思う。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地および対象面積	実施方法	対策資材および機械器具の種類、型式、数量
未利用地の草地造成	浅茅野 シネシンコ 1047ha	いずれの耕起法でも良いが砂層が浅いところでは表層攪拌方式	燐酸は20Kg/10a以上
施肥改善	” ”	燐酸の多用、堆厩肥の多投	堆肥は秋施用が良い。
土地改良	シネシンコ 9ha	明暗渠排水工事	

< ベニヤ 保全対策地区 >

(1) 分布状況

郡市町村名	面積(ha)	備考(該当土壌区)
宗谷郡猿払村	2	ベニヤ

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

① 特徴と問題点

本地区はオホーツク海岸面に並列する海岸砂丘地帯である。強風によつて風蝕が若干認められ

る。土壌は全層海砂からなり、我国唯一の典型的なポドソルとして著名である。すなわち、表層はA₁層でモルの集積があるが、その直下層からは腐植はなく、鉄、ぼん土の漂白層、集積層となっている。したがって養分保肥力に乏しく、また養分の絶対量も極端に少ない。本地区の大部分は未利用地である。

② 當農の方向

本地区の自然植生景観が独特なところから、北オホーツク道立自然公園の指定を受けている地域でもある。本地域は農業上に利用するのは地力論的に不利でもある。むしろ公園として、または学術上貴重な土壌として自然の姿を破壊することなく活用する方が有利である。

しかし隣接する浜頓別町では一部公共草地として利用されている地域もあるので、これの維持に対する技術的な方向は不耕起～表層攪拌方式の導入と多肥による草量の確保以外にない。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地および対象面積	実施方法	対策資材および機械器具の種類、型式、数量
草地造成方式	ベニヤ 2 ha	不耕起～表層攪拌方式の厳守	
肥培管理	〃	各種養分の多用、堆厩肥、尿の還元	技術指導の徹底

< 鬼志別保全対策地区 >

(1) 分布状況

郡市町村名	面積 (ha)	備考 (該当土壌区)
宗谷郡猿払村	149	鬼志別 知来別 ボロナイ

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

① 特徴と問題点

本地区は小河川流域に分布する平坦な河成沖積で、春季の融雪時に冠水をうけることがある地区である。

土壌が粘質なために排水不良地が多く、しばしば過湿を呈するところが多い。一般に生産力は

高いが、土地が狭少であるため機械化に不適である。

(2) 営農の方向

前述の如く面積が狭少であるため、機械化が必要な草地酪農上の隘路となっている。今後施肥改善によつて多収を図ることが大切である。また春季の洪水を防止する手段や、暗渠排水等によつて過湿を抑制しなければならない。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地および対象面積	実施方法	対策資材および機械器具の種類、型式、数量
施肥改善	鬼志別 知来別 ポロナイ 149 ha	施肥量の増加、草地造成時における リン酸の多投	技術指導の徹底
土地改良	〃	河川改修、明暗渠排水工事	

＜ポロ保全対策地区＞

(1) 分布状況

郡市町村名	面積 (ha)	備考(該当土壌区)
宗谷郡猿払村	113	カムイ ポロ 猿骨 モケウニ

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

(1) 特徴と問題点

本地区は小河川の下流域およびカムイ沼周辺に分布する過湿な低位、中間高位泥炭である。落差が小さいことと、中間泥炭に埋木があるのでほとんどが未利用地である。

(2) 営農の方向

泥炭地の草地化に際しては、幹線明渠、暗渠を設置して排水を図ることがもつとも大切である。しかし泥炭地の草地化は問題点が多いので、鈹質土壌の開発を先行すべきである。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地および 対象面積	実施方法	対策資材および機械器具の 種類、型式、数量
土地改良	カ ム イ ボ 口 猿 骨 モケウニ	暗渠排水工事 明渠 “	